

たし候 昨日は欣也よりも同様のよき便りに接し候

いろいろ申したく候へど今日はこれにて拱くべく、御主人に
くれぐれもよろしくその許よりお申入願度候 久々にて変りし
土地故御自愛專一になさるべく候 不盡

十月九日夕 東京目黒 兄

三千代殿

■大正13年

一月元旦 青木幸太郎宛

東京都下目黒区三六九 海野 厚一

賀正

日本がなにがなうれしお元日

甲子元旦

長頸子

季題寸言三章

何といつても、元日はいゝ。が、強いて言へば、それも午前
十時までだ。元日や草の戸越しの麦畠……日本はいゝ、など、し
みじみ思ふ。——十一時が過ぎたら、もういけない。

二日は——廻礼もよして、朝寝をして、家内中で遊びたい。
親と子がくつろいでな……、歌留多なら、源平でない。散らし
といふ心持。

三日は眼覚めの欠伸が二つ。

近 詠

(曲水9-6)

わたつみの底に網這ふ梅雨かな
すみくくと大空暮れぬ蓑虫よ

落の葉の秋のしじまようつりゆく

震後籠居

秋の日のあまりに明かし門の外

某氏旧居

颯啼いて落の葉ばかり秋日かな

句 帖

(曲水9-7)

蓑虫のいとなみよ秋の深みたれ

春の夜の闇ただよへり燈を消して

友来たりて我が像を描く

閑かにもぼけし日ざしや桃の花

入信の後は淨らかに住みなせしがその寡婦みまかりぬ

湯灌の燈そのままにある蛙かな

曲水吟社五月例会 席題「柳、行春」

荷揚して濁りし日やな柳影

いやはての春行くか草のあかるさに

句 帖

(曲水9-8)

髪刈つて雨にぎはしや夜半の春

籠青う魚介に春も名残かな

春の夜や更けてゐたりし風の原